

高知県宿毛市方言



高知県方言区画図

【高知県の方言区画】高知県方言は、東部・中部の「土佐方言」（「高知方言」とも呼ばれる）と西部の「幡多方言」に大きく二分される。「東ことば」「西ことば」と呼び分けられることもある（吉田 1982）。その境界は旧幡多郡（幡多方言側）と旧高岡郡（土佐方言側）の境界とほぼ重なるが、旧幡多郡佐賀町は土佐方言に属し、旧高岡郡檮原（ゆすはら）町は幡多方言に入る。現在は、高岡郡窪川町と幡多郡大正町が合併して高岡郡四万十町になったため、四万十町の真ん中を方言区画の境界線が走るという状況になっている。

土佐方言と幡多方言を分ける最も大きな特徴として、土佐方言が京阪式アクセント（または京阪式に準ずるアクセント）であるのに対して、幡多方言が（内輪）東京式アクセントであることがあげられる。表現法の点では、原因・理由の接続助詞で土佐方言は「-キニ（キン）」を使うのに対して、幡多方言は「-ケニ（ケン）」を使うこと、アスペクト表現で土佐方言は「降りユー/降りヨウ/降りヨル」「降っチュー/降っチョウ/降っチョル」（「降りヨウ・降っチョウ」は長音ではなく二重母音で発音される）を用いるのに対して、幡多方言は「降りユー」「降っチュー」を用いないこと、やさしい命令表現で土佐方言は「行きや・見（一）や」といった「連用形+ヤ」の形を用いるのに対して、幡多方言では「行ったや・見た

や」のような「過去形+ヤ」の形を用いることなどがあげられる。

なお、幡多方言は隣接する愛媛県宇和地方（宇和島市以南）の方言とアクセントが共通するため、「渭南方言区」としてまとめられることもある。また、土佐方言のうち東部の沿岸地域は、否定表現に「行カヘン/行ケヘン」を用いるなど阿波方言と共通する特徴が見られることもある。

【宿毛市方言について】宿毛（すくも）市は高知県の西部に位置し、中村市（現・四万十市）や土佐清水市とともに幡多方言域に入る。

【表記について】老年層話者は、「鈴」[suzu] vs. 「水」[mi`du]や、「富士」[fuzi] vs. 「藤」[fu`dʒi]のように、入りわたりの鼻音と子音の音価で四つ仮名を区別することもある。しかし、老年層のみに観察される現象なので、ここでは、[ʒi][dʒi]どちらも「ジ」と表記し、[zu][du]どちらも「ズ」と表記する。また、入りわたり鼻音に関しても、有声子音[g][d]に付随する現象であるため、特に表記していない。

【調査概要】本稿の記述は、先行研究の記述（参考文献参照）に加えて、以下の3名に対する調査の結果をもとにしている。話者1：1924年生まれ、外住歴なし。話者2：1952年生まれ、女性、0歳～18歳：高知県宿毛市、18歳～20歳：大阪府、20歳～29歳：神奈川県、29歳～調査時：高知県宿毛市。話者3：1984年生まれ、男性、外住歴なし。なお、宿毛市が属する幡多地方の方言は、愛媛県西南部との共通点が多いため、愛媛県宇和島方言の記述を参考にしたところもある。用例は、昔話資料、談話資料、先行研究の記述にあげられている例文などから引用した（用例出典参照）。引用に際しては、原文の表記方法のまま引用した。したがって、「キレイヂャ」のように、長音や四つ仮名の表記が本文と異なることがある。

高知県宿毛市方言の活用表

《動詞》

		多段一般型 書く	多段特殊型 死ぬ	一段型 見る	来る	する
終 止 類	断定非過去	カク	シヌル シヌ	ミル	クル	スル
	断定過去	カイタ	シンダ	ミタ	キタ	シタ
	命令	カケ	シネ	ミロ ミレ ミヨ	コイ	シヨ セヨ セレ
	禁止	カクナ カカレン	シヌルナ シヌナ シナレン	ミルナ ミラレン	クルナ コラレン	スルナ セラレン
	意志	カコー	シノー	ミロー	コー コヨー	シヨー/ショー
	推量	カクロー カクジャロー	シヌルロー シヌロー シヌルジャロー シヌジャロー	ミルロー ミルジャロー	クルロー クルジャロー	スルロー スルジャロー
	過去推量	カイツロー	シンズロー	ミツロー	キツロー	シツロー
接 続 類	連体非過去	カク	シヌル シヌ	ミル	クル	スル
	連体過去	カイタ	シンダ	ミタ	キタ	シタ
	中止	カイテ カイチ	シンデ シンジ	ミテ ミチ	キテ キチ	シテ シチ
	仮定	カケバ カキヤー	シヌリヤー シネバ シニヤー	ミレバ ミリヤー	クレバ クリヤー	スレバ スリヤー
派 生 類	否定	カカン	シナン	ミン	コン	セン
	丁寧	カキマス	シニマス	ミマス	キマス	シマス
	使役	カカス カカサス	シナス シナサス	ミサス ミラス ミラサス	コサス コラス コラサス	サス セラス ササス セラサス
	受身	カカレル	シナレル	ミラレル	コラレル	サレル セラレル
	可能	カケル カケレル	シネル シネレル	ミレル ミレレル	コレル コレレル	《デキル》 セレル
	尊敬	カカレル カキナサル	シナレル シニナサル	ミラレル ミナサル	コラレル キナサル 《オイデル》	サレル シナサル
	継続	カキヨル カイチヨル	シニヨル シンジョル	ミヨル ミチヨル	キヨル キチヨル	シヨル シチヨル
	希望	カキタイ	シニタイ	ミタイ	キタイ	シタイ
	のだ	カクガ (ジャ)	シヌルガ (ジャ) シヌガ (ジャ)	ミルガ (ジャ)	クルガ (ジャ)	スルガ (ジャ)

多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak·u	カイ-タ	kをiにする。「行く」ik·uはkをQ(促音)にし「イッ-タ」あるいはkを除いた「イ-タ」になる。
g	嗅ぐ kag·u	カイ-ダ	gをiにする。-タが-ダになる。
s	出す das·u	ダシ-タ ダイ-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる、または、sをiにする。
t/c	立つ tac·u	タッ-タ	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin·u	シン-ダ	nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob·u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom·u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る kir·u	キッ-タ	rをQ(促音)にする。
w/ø	買う ka(w)·u	コー-タ	wがø(子音なし)に。wの前の母音がaの場合はoに変える。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	学生 [ガクセー] (だ)
終 止 類	断定非過去	アカイ	シズカナ	学生(ゼ)
	断定過去	アカカッタ	シズカナカッタ シズカジャッタ	学生ジャッタ
	推量	アカイロー アカカロー	シズカナロー シズカジャロー	学生ジャロー
	過去推量	アカカッツロー アカカッタジャロー	シズカナカッツロー シズカジャッツロー シズカジャッタロー	学生ジャッツロー 学生ジャッタロー
接 続 類	連体非過去	アカイ	シズカナ	《学生ノ》
	連体過去	アカカッタ	シズカナカッタ	学生ジャッタ
	中止	アコーテ	シズカデ	学生デ
	仮定	アカケリヤー アカカッタラ	シズカナラ(バ) シズカナケリヤー シズカナカッタラ	学生ナラ(バ) 学生ジャッタラ
派 生 類	否定	アコーナイ	シズカデナイ シズカジャナイ	学生デナイ 学生ジャナイ
	なる	アコナル	シズカニ	学生ニ
	丁寧	アカイデス	シズカデス	学生デス
	のだ	アカイガ(ジャ)	シズカナガ(ジャ)	学生ナガ(ジャ)

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

規則的な活用型として基幹多段型(以下「多段型」と基幹一段型(以下「一段型」)がある。おおよそ、多段型にはa類のうち「書く」「居(お)る」類、一段型にはb類(「見る」「起きる」「開ける」類)動詞が所属する。

多段型の基幹には、ア・イ・ウ・エ・オ段の5形、および音便形がある。音声的な融合によってア段拗

音になることもある。「カク」(書く)の場合、カカン(kak·a-N)、カキ-タイ(kak·i-ta-i)、カク(kak·u)、カケ(kak·e)、カコ(ー)(kak·o(R))、カイ-タ(kai·ta)、カキヤー(kak·jaR)などがある。語幹末子音には、k(カ行)、g(ガ行)、s(サ行)、t(ダ行)、b(バ行)、m(マ行)、r(ラ行)、w(ワ行)がある。語例は、表「多段型動詞の基幹音便形」を参照されたい。

多段型に近いが、やや不規則な活用をする動詞に、語幹末がn(ナ行)の「シヌル」(死ぬ)と「イヌル」

(帰る)がある。「カク」等を「多段一般型」とするのに対し、この2語を「多段特殊型」とする(両者を区別する必要がない場合、単に「多段型」とする)。

「シヌル」を例にすると、否定形シナ-ン(sin-a-N)、希望形シニ-タイ(sin-i-ta-i)、断定非過去形・連体非過去形シヌ(sin-u)など、多くは多段型と同じ活用形となるが、断定非過去形・連体非過去形シヌ-ル(sin-u-ru)、仮定形シヌ-リャー(sin-u-rjaR)、および、前者を基本とする禁止形シヌ-ル=ナ(sin-u-ru=na)、推量形シヌ-ル=ロー(sin-u-ru=roR)などで、ウ段形シヌ(sin-u)にラ行で始まる接辞ル・リャーが付く形が現れる。古典語の「ナ行変格活用」の特徴を持つと言える。なお、若年層ではナ変活用的な形は使われなくなっており、「シヌ」は規則的な多段型になりつつある。また、動詞「イヌ」は使われなくなり、代わりに「カエル」(帰る)を用いるようになってきている。

一段型には、ミ-ル(mi-ru)、オキ-ル(oki-ru)など基幹がイ段の動詞と、ネ-ル(ne-ru)、アケ-ル(ake-ru)など基幹がエ段の動詞がある。一段型の活用形のうち、多段型のr語幹動詞に対応した形は、「ミル」を例にすると、断定非過去・連体非過去形ミ-ル(mi-ru)、およびそれを基本とする禁止形ミ-ル=ナ(mi-ru=na)、推量形ミルロー(mi-ru=roR)、命令形ミ-レ(mi-re)、意志形ミ-ロー(mi-roR)、仮定形ミ-レバ(mi-reba)・ミ-リャー(mi-rjaR)、使役形ミ-ラス(mi-rasu)、受身・尊敬形ミ-ラレル(mi-rareru)、可能形ミレル(mi-reru)・ミレレル(mi-rereru)であり、共通語よりもr語幹化が進んでいる。

不規則な活用をする動詞として、「クル」(来る)、「スル」(する)がある。ともに一段型に近い活用をするが、「クル」は、キ-タ(k-i-ta)、ク-ル(k-u-ru)、コ-イ(k-o-i)などのように、基幹が「キ」「ク」「コ」の3段に、「スル」は、サ-レル(s-a-reru)、シ-タ(s-i-ta)、ス-ル(s-u-ru)、セ-ン(s-e-N)などのように、基幹が「サ」「シ」「ス」「セ」の4段にわたる。また、意志形ショー(s-joR)のように、音声的な融合によりオ段拗音になることもある。また、「スル」は命令形にシ-ヨ・セ-ヨがある点で一段型との類似がみとめられる。一方で、命令形セ-レ、使役形セ-ラス、可能形セ-レルがある点で、「ser」を語幹とするr語幹化が進んでいるとみることもできる。

(2)各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

断定非過去形は共通語と同じで、多段型動詞ではウ段形の「カク」「シヌ」、一段型動詞では基幹にルを付した「ミル」「来る」「する」でウ段形にルを付した「クル」「スル」となる。

多段特殊型には「シヌル」など「ウ段形ナル」があり、ウ段形「シヌ」と併用されている。中年層までは「シヌル」を使用することが多いが、若年層では「シヌ」の方が多い。多段特殊型動詞には「イヌル・イヌ(往ぬ)」もあるが、中年層以下では「帰る」を代わりに使用し、「イヌル・イヌ」は使われなくなっている。

- ・エライ オソーナツタケン モー ワシャー イヌルゼ(ずいぶん遅くなったからもう私は帰るよ。)(大方)

断定非過去形と後ろに続く終助詞が融合して、「カカーヨ」(<カクワヨ)の形になることがある。

- ・「あれが黄金か。あんなもんなら、わしの炭がまのまわりになんぼでもあらあよ。まあついてきてみよや。」(あれが黄金か。あんな物なら、わしの炭窯の周りにいくらでもあるよ。まあついてきてみろよ。)(昔話・中村市奥鴨川・「炭焼き長者」)
- ・ハー キョー ワシモー サシカカッタ シゴト ガ アルノジャガ マ ツゴード マタ ナニヨ ノチン デテ イカー(はあ、今日、私も差し迫った仕事があるのだが、まあ都合で、また、なんです、後で出て行くよ。)(大月)

〈断定過去形〉

断定過去形は、多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹(=語幹)に、「来る」「する」はそれぞれイ段形「キ」「シ」に、「タ」を接続する。多段型s語幹動詞が「ダイタ(出した)」のようにイ音便形をとることもある。

- ・そこいいちべんを放いたと。(そこに行ってべん [=犬の名前]を放したと。)(昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)

なお、多段型k語幹動詞「行く」は「イタ」となり、促音便化しないことがある。また、一段型動詞の「着る」だけは「キータ」のように基幹(語幹)

が長音化し、「来る」の過去形「キタ」と差別化される。同じ1拍の基幹を持つ「見る」「寝る」が長音化することはない。ただし、「煮た・似た」や「寝た」が長音化するという記述もある(吉田1982:432)。

「する」の過去形「シタ」は、/s/ > /h/の変化により「ヒタ」、さらに/h/が脱落して「イタ」となることがある。

- ・ハズミモ ヒター アノ トキラニャ オマエ(盛んでもあった[直訳:はずみもした]、あの時などには、おまえ。) (大月)

また、「タ」が後続の終助詞と融合して「ト」になることがある。

- ・センセーニワ ユーケン ユーテ イトーネー (先生には言うから(と)言っていましたよねえ。) (大月)

〈命令形〉

命令を表す形は2種類ある。一つはぞんざいな命令形で、多段型動詞では「カケ」などのエ段形、一段型動詞では「ミヨ」「オキヨ」など基幹(語幹)に「ヨ」を付けた形と、「ミロ」「ミレ」、「オキロ」「オキレ」のように基幹に「ロ」「レ」を付けた形がある。「来る」は不規則な「コイ」のみである。「する」には、「シ」「セ」に「ヨ」を付けた「シヨ」「セヨ」がある。これに加えて、「セレ」も用いられており、共通語よりもr語幹化が進んでいる。なお、「シヨ」「セヨ」は老年層が使うという意識があり、若年層は「セレ」を用いる傾向にある。

- ・「あれが黄金か。あんなもんなら、わしの炭がまのまわりになんぼでもあらあよ。まあついてきてみよや。」(あれが黄金か。あんな物なら私の炭窯の周りにいくれでもあるよ。まあ付いてきてみるよ。) (昔話・中村市奥鴨川・「炭焼き長者」)

- ・「よっし。こんだ一、ごんやれ、まけなよ。」(よし、今度はごんがやれ。負けるなよ。) (昔話・幡多郡佐賀町・「えんこうずもう」)

もう一つの命令形は「カイトヤ」「ミタヨ」のようなやさしい命令形である。これは、断定過去形に「ヤ・ヨ」を付けた形を用いる。

- ・「はよう、たすけてくれたや。」(早く助けておくれ。) (昔話・中村市有岡・「えんこ」)
- ・チト アソビニ キターヨー (ちょっと遊びに

来なさいよ。) (大方)

- ・マー ソノ トキニア アノ ナンチャ ナイケンド ヨブ ツモリヂャケン ゼヒ キテ クレタヤ (まあ、その時には、何も無いけど、招待するつもりだから、ぜひ来て下さいよ。) (大方)

〈禁止形〉

禁止形には、ぞんざいな禁止形と2種類のやさしい禁止形がある。ぞんざいな禁止形は、断定非過去形に「ナ」を付け、「カクナ・ミルナ・クルナ・スルナ」という形を用いる。やさしい禁止形の一つは、多段型動詞はイ段形、一段型動詞は基幹、「くる」「する」はそれぞれ「キ」「シ」に「ナ」を付加した、「カキナ・ミナ・キナ・シナ」という形をとる。この禁止形とぞんざいな禁止形は、どちらも終助詞「ヨ・ヤ」を後続させることが多い。

- ・「よっし。こんだ一、ごんやれ、まけなよ。」(よし、今度はごんがやれ。負けるなよ。) (昔話・幡多郡佐賀町・「えんこうずもう」)

もう一つのやさしい命令形は、多段型動詞のア段形「カカ」に「レン」、一段型動詞の基幹、「来る」の「コ」、「する」の「セ」に「ラレン」を付ける。この形は可能形と似ているが、当該方言の可能形は「カケン/カケレン・ミレン/ミレレン・コレン/コレレン」となるため、混同することはない。

- ・コドモワ ミラレン。(子供は見てはいけない。) (方言)
- ・モー セラレンゾネ。(もうしてはいけないですよ。) (方言)

〈意志形〉

多段型動詞はオ段長音形、一段型動詞は「ミヨー」など基幹に「ヨー」を付ける形と、「ミロー」など基幹に「ロー」を付ける形が併存する。若年層は「ミロー」「オキロー」の形だけを使う傾向にあり、一段型動詞のr語幹化が進んでいると言える。「来る」は「コー」と「コヨー」が併存する。「する」には、「シヨ」と「シヨヨー」が併存する。「する」には、「シヨ」と「シヨヨー」が併存する。「する」には、「シヨ」と「シヨヨー」が併存する。「する」には、「シヨ」と「シヨヨー」が併存する。

- ・モー ネロー。(もう寝よう。) (方言)
- ・ソトエ デロー。(外へ出よう。) (方言)
- ・こりやあいかん、きょうはもういのうつことで、山をおりよつたらねや、(これはいけな

い、今日はもう帰ろうということで、山を下りていたらね、) (昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)

- ・マー ソンデモ イッパイ ツケロカノーシ (まあ、それでも一杯つけましようかねえ。) (大方)

〈推量形〉

推量形は、断定非過去形に「ロー」または「ジャロー」「ヤロー」を付ける。「ロー」を付す形が伝統的であり、「ジャロー／ヤロー」を付す形は新しい。老年層は「ジャロー」、若年層は「ヤロー」を用いる傾向がある。

- ・あのねや、山田 (宿毛市山奈町山田) のおくに権現駄場つとこあんろうが。(あのね、山田の奥に権現駄場というところがあるだろう。) (昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)
- ・「えんこは、手の長いものじゃと聞くからには、半里 (約二キロ) ばあ下の、土居橋あたりにおるろう。」(えんこは手が長いものだと聞くからには、半里ほど下の土居橋あたりにいるだろう。) (昔話・中村市有岡・「えんこ」)

〈過去推量形〉

過去推量形は、多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹に、「来る」「する」はそれぞれ「キ」「シ」に、「ツロー」を接続する。若年層では、「カイトロー」「カイトヤロー」など「断定過去形+ロー／ヤロー」の形を用いるようになってきている。

- ・マー タイテ オジーサン アレジャツツロ、コトツロー (まあ、だいぶんおじいさん、あれだったでしょう、お疲れだったでしょう。) (大方)
- ・「おい、まあ見よ、きょうはなんにたまげつろうねや。」(おい、まあ見ろよ。今日は何にたまげただろうかね。) (昔話・中村市具同・「泰作さん」)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は断定非過去形と同形で、ウ段形の「カク」「シヌ」「ミル」「クル」「スル」となる。多段特殊型動詞に「シヌル・イヌル」があり、中年層までは「シヌル・イヌル」の使用が多く、若年層は「シヌ・イヌ」の使用が多い点も共通する。

- ・ソノ ジブンニー タベル モノデモ (その頃に

は食べるものでも、) (大方)

〈連体過去形〉

連体過去形は断定過去形と同形で、多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹 (= 語幹) に、「来る」「する」はそれぞれ「キ」「シ」に、「タ」を接続する。多段型 s 語幹動詞が「ダイタ (出した)」のようにイ音便形をとることもある。断定過去形と同様に、多段型 k 語幹動詞「行く」は「イタ」となり、促音便化しないことがある。また、一段型動詞の「着る」だけは「キータ」のように基幹 (語幹) が長音化したり、「シタ」が音声変化の結果「ヒタ・イタ」となることもあるのも断定過去形と共通する。

- ・わんらあ、白べん黒べんの話い聞いたことあるか。(お前達、白べん黒べんの話聞いたことがあるか。) (昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)
- ・「弥七、どういたもんならや。」(弥七、どうしたんだよ。) (昔話・幡多郡佐賀町・「えんこうずもう」)
- ・ワシラノ コマイ イブシニャー イヨイヨ (中略) フイデモ アワセ キータ モノワ ナイ。(私たちの小さい時分には、まったく (中略) 冬でもあわせを着たものはない。) (大方)

〈中止形〉

多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹に、「来る」「する」はそれぞれ「キ」「シ」に、「テ」を接続する。この「テ」が「チ」になり、「カイチ (書いて) ・ミチ (見て)」のようになることもある。多段型 s 語幹動詞が「ダイテ・ダイチ (出して)」のようにイ音便形をとることもある。

- ・ほいから新次郎じいは、人んうそじゃいかもしれんけん思うち、山刀でうわばみんうろこを一まいはいじ、しょうこに取っちもんだと。(それから新次郎じいは、人が嘘だと言うかもしれないと思って、山刀でうわばみの鱗を一枚剥いで、証拠に取って戻ったと。) (昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)
- ・「知らん、話しちや。」(知らない、話してよ。) (昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)

また、次の3点は過去形と共通している。すなわち、(1)「行く」の中止形は「イテ」または「イチ」と促音便化しないことがある、(2)「する」の中止形

「シテ」は音声変化により「ヒテ」「イテ」となることがある、そして、(3)「着る」の中止形は「キータ」と長音化することがある、の3点である。

- ・お藤がついていてみたら、あたりいちめんごくたい、ぴかぴかの黄金の山じゃったと。(尾藤がついて行ってみたら、辺り一面、ぴかぴかの黄金の山だったと。)(昔話・中村市奥鴨川・「炭焼き長者」)
- ・そこいいちべんを放いと。(そこに行つてべん [=犬の名前] を放いと。)(昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)
- ・「なに、なんちゃじゃあるかえ、だんごにひて投げてくれりゃあええもん。」(なに、何のことはない、団子にして投げてくれればいいことだよ。)(昔話・中村市具同・「泰作さん」)
- ・ハオリヤラ ハンテヤラ カワラン ヨーナ モノー キータ (羽織だか半纏だかしれないようなものを着て、)(大方)

〈假定形〉

假定形は「カキヤ」など多段型動詞の拗音ア段長音形、「ミリヤ」など一段型動詞の基幹に「リヤ」を付けた形が使われる。「(レ)バ」が付いた「カケバ」「ミレバ」などの音声的縮約形である。「来る」では「クリヤ」、「する」では「スリヤ」となる。

- ・たまげち見りゃあ、われ、松の木から血ん流れよら。(驚いて見たら、あれ、松の木から血が流れているじゃないか。)(昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)
- ・ソガイ ヒテ アサ チート トーカラ イキヤ ハー シシニ デョーター ナンニ デョータ ユーチャー ヨー モンタ ユー ハナシヤナー (そんなふうにして朝だいぶ早くから行けば、「猪に出会った、なにに出会った」と言つては度々引き返したという話だね。)(大月)

多段型動詞の音便語幹、一段型動詞の語幹、「来る」「する」の「キ」「シ」に「タラ」「ダラ」を付けた「カイトラ・ミタラ・キタラ・シタラ」という形もある。断定過去形、連体過去形と同様、一段型動詞「着る」だけは長音化して「キータラ」となる。また、「する」の假定形「シタラ」は、音声変化により「ヒタラ」「イタラ」となる。

- ・「カエルさんよ、雨をふらしてくれたら、むす

めをよめにやるがのう。)(蛙さんよ、雨を降らせてくれたら、娘を嫁にやるがねえ)(昔話・幡多郡三原村・「藤がとどろ」)

- ・モー ソノ ジブンニヤ モー ココデ ビョーキヒタラ イヌジニヨ (もうその頃にはここで病気したらおしまいだよ。)(大月)

なお、假定逆接表現として「カイトチ・ミタチ・キタチ・シタチ」(「書いたつて」に相当する)のように、断定過去形に「チ」を付ける形もある。

- ・けんど、家いうたち小屋じゃけん、又次郎はこまった。(けれど、家といつても小屋だから、又次郎は困つた。)(昔話・中村市奥鴨川・「炭焼き長者」)
- ・エー チャケンノー ドコカシコ イタチ イッコ ソノ ミンナニ シンパイ スルニヤー ヨーバン (ええ、だからねえ、どこへ行つたつていっこうみんなに心配するには及ばない。)(大方)

〈否定形〉

否定形は、「カカン」「シナン」「ミン」「コン」「セン」のように、否定接辞「ン」を付加する。

否定形の活用を「見る」で代表させて示すと次のようになる(△は使用が稀な形式)。

断定非過去・連体非過去形 ミン

断定過去・連体過去形 ミンカット・ミラッタ・
△ミザッタ・△ミララッタ

推量形 ミンロー・ミンジャロー

中止形 ミンデ・ミント・△ミンズツ (ニ)・△ミンズク (ニ)

假定形 ミニヤ・ミラニヤ

否定形の過去形は、「カカンカット」「カカラッタ」が用いられる。一段型動詞・「来る」・「する」の過去否定形は、それぞれ「ミラッタ」「コラッタ」「セラッタ」となる。『方言文法全国地図』では「イカザッタ」の使用が見られるが、現在ではあまり聞かれない。一段型動詞・「する」にはこの他に、「ミララッタ」「セララッタ」というr語幹化した形がある。しかし、「ミンカット」「センカット」の使用が増えるにつれてなくなりつつある。

- ・二、三年前から、かわらがつつて雨がもつたが、ものぐさな泰作さんは、いっこうなおそうともせざつた。(昔話・中村市具同・「泰作

さん)

- ・セワニ ナリヨッタニー チャント エー シノ ガラッテ (お世話になっていたのにすっかりしのごことができなくて。) (大方)

否定の推量形は、否定形に「ロー」、または「ジャロー・ヤロー」を付加した形を用いる。

- ・「どうぞゆるしちくれんろうかと……。」(どうか許してくれないだろうかと。)(昔話・中村市有岡・「えんこ」)
- ・オマンモ シランロー。(あなたも知らないでしょう。)(方言)

否定形の中止形は、「カカンデ」「ミント」のような「否定形+デ」「否定形+ト」が主に用いられるが、「カカイデ」や「カカンズツ」「カカンズク」という形もある。

- ・カカンデモ エイ。(書かなくてもよい。)(方言)
- ・セーデモ カマン。(しなくてもよろしい。)(方言)
- ・ヨシ ヨシ ソリヤー ワスレント コーテクルケンヤー (よしよし、それは忘れないで買ってくるからねえ。)(大方)
- ・シライデ。(知らなくてどうする。もちろん知っているよ。)(方言)
- ・えんこうは後ろをふりむきもせんずつ、川の底へもぐってしもうたと。(えんこうは振り向きもしないで川の底へ潜ってしまったと。)(昔話・幡多郡佐賀町・「えんこうずもう」)
- ・ナンニモ ユワンズクニ シゴトモ ヨーケ センズクニ ヤルガ (何にも言わないままに、仕事もあまりしないままにしているが...) (大方)

否定仮定形にも r 語幹化は進んでおり、「ミニヤー」(または「ミナー」;以下「ミニヤー」で代表させる)のほかに「ミラニヤー」がある。また、「する」でも「セニヤー」に加えて「セラニヤー」がある。ただし過去否定形と同様に、世代が下るにつれて r 語幹化形の使用は少なくなっていく。

- ・オモシロイ モンガ キタラ ミニーモ イコージ キクモンガ キタラーノー キカニヤー イカン (面白いものが来たら見にも行こうし、聞き物が来たら聞かなければいけない。)(大

方)

- ・ヂャケン マー ウルソーテモ デテ イカナ イカナーノー (だから、まあ骨が折れても出ていかなければいけないのさ。)(大方)

関連して、取り立て否定形は「ミリヤーセン」「クリヤーセン」「スリヤーセン」のような r 語幹化した形が定着している。ただし、「来る」「する」に関しては、「キヤーセン」「シヤーセン」という形も併用される。

〈丁寧形〉

丁寧形は共通語と同様に接辞「マス」を付加する形をとる。多段型動詞はイ段形に、一段型動詞は基幹に、「来る」は「キ」に、「する」は「シ」に、それぞれ「マス」が続く。

「マス」の活用を一段型動詞「見る」で示すと次のようになる。(△は使用が稀な形式)

断定非過去形	ミマス
断定過去形	ミマシタ
意志形	ミマシヨー
推量形	ミマスロー・ミマスジャロー
中止形	ミマシテ
仮定形	ミマシタラ・△ミマスリヤ
否定形	ミマセン

- ・ミソメタ ヒッ ヒトデモ オカシカッタケン ミソメン ヒトワ イヨイヨ オモシロカッタゾーゼ オモイマスナー (見慣れた人でもおかしかったから、見慣れない人はなおさら面白かっただろうと思いますよ。)(大月)
- ・ドーモ オーキニ ゴツツオーニ ナリマヒタ (どうもたいそうご馳走になりました。)(大月)
- ・ソコドロロジャ アリマセナー (それどころではありませんよ。)(大月)
- ・マー キキマスリヤ マ オジーサンガ マ トツゼン マ ナクナリマシタ ユーテカラ ドーモ... (まあ、承りますと、まあ、おじいさんが、まあ、突然亡くなられたそうで、どうも...) (大月)

〈使役形〉

活用表にはあげていないが、「ス・サス・ラス」のほかに「セル・サセル・ラセル」系列の接辞を用いた形もある。前者は多段型動詞に準じた活用、後者

は一段型動詞に準じた活用をとる。なお、使役接辞のサ行音がハ行音になることもある。特に、「キカシタ(聞かせた)」が「キカヒタ」になるように、「シ」が「ヒ」になることが多い。

- ・そんな、びんぼうぐらしでも、子どもだけには、正月にもちだけでもたべらしちやらないかん。(そんな貧乏暮らしでも、子供だけには正月に餅だけでも食べさせてやらなければならぬ。)(昔話・高岡郡葉山村・「山んばのもち」)
- ・トッショリシガ ハナヒテ ワシラニ キカヒタ (年寄り達が放して私たちに聞かせた。)(大月)

当該方言では、(1) 一段型動詞・「来る」・「する」のr語幹化と、(2) 「サス・サセル」の使役接辞化、という2つの変化が起こった結果、使役形式に複数のバリエーションが存在するようになった。「(サ)ス」系列の形式でそれぞれの変化をまとめると次のようになる。以下の表に「(サ)セル」形式のr語幹化と使役接辞化形式も加わるので、使役形式のバリエーションの数は多段型動詞で最大4種類、一段型動詞・「来る」で最大6種類、「する」で10種類となる。

	変化前	→	(1)	→	(2)
死ぬ	シナス		——		シナス
見る	ミサス		ミラス		ミラス
来る	コサス		コラス		コラス
する	サス		——		ササス
			セラス		セラサス

ただし(2)の変化は現在進行中であり、動詞によって生産性に違いがある。若年層になるほど多くの多段型動詞で(2)の形式があらわれる。

〈受身形〉

受身形は共通語と同じく、「カカレル・シナレル・ミラレル・コラレル・サレル」のように、多段型動詞および「する」のア段形に「レル」、一段型の基幹および「来る」のオ段形に「ラレル」を付加した形を用いる。なお、「する」には「セラレル」という、r語幹化した形もある。「(ラ)レル」自体は一段型動詞に準じた活用をとる。

- ・弥七は、友だちみんなあから、ののしられてしょんぼりしてしもうたと。(弥七は友だち

みんなから罵られてしょんぼりしてしまったそうだ。)(昔話・幡多郡佐賀町・「えんこずもう」)

- ・「そうかえ、そりやえらいことになったのう。して、どうして、手をくくられたがぞ。」(そうか、それはえらいことになったねえ。で、どうして手をくくられることになったんだ。)(昔話・中村市有岡・「えんこ」)

〈可能形〉

可能形は「カケル・シネル・ミレル・コレル」のように、多段型動詞のエ段形に「ル」、一段型動詞の基幹や「来る」のオ段形に「レル」を付加した形(可能動詞)を用いる。「する」には補充形「デキル」が用いられる。「セレル」というr語幹化した形もあるが、新しい形式らしく若年層しか用いない。共通語のように、一段型動詞・「来る」の可能形で「ミラレル・コラレル」の形を用いることは少ない。否定形では「カカレン・シナレン・ミラレン・コラレン・セラレン」という基幹に「(ラ)レン」を付加した形が禁止の意味になるため、専ら「カケン・シネン・ミレン・コレン・セレン(デキン)」を用いる。

- ・シンボー セレンローカ。(しんぼうできないだろうか。)(方言)
- ・びんぼうで、うまいもんもたべれんし、なんぎなことも多かった。(昔話・高岡郡葉山村・「山んばのもち」)

能力可能の表現として「ヨー {カク/カカン}」「ヨー {ミル/ミン}」のように、副詞「ヨー」を各動詞の断定形(あるいは断定否定形)に付加するものがある。古くは副詞「エー」も用いられたが、現在の中年層以下は用いなくなっている。なお、「ヨー {カケル/カケン}」「ヨー {ミレル/ミレン}」のように、「ヨー」と可能動詞を組み合わせて能力可能(不可能)を表すこともあるが、あまり生産的ではない。

- ・セワニ ナリヨッタニー チャント エー シノガラッテ (お世話になっていたのにすっかりしのぐことができなくて。)(大方)

当該方言では可能動詞が早くから定着していた。その結果、非過去断定形の末尾がルの動詞(すなわち多段型r語幹、一段型、「来る」「する」)が「~レル/レン」の形を持つことになる。この「~レル/レン」を、末尾がル以外の活用をとる動詞に適用した

二重可能形式が発生している。この二重可能化は、少し遅れて末尾がルの動詞にも波及している。例えば、「書ケレル・読メレル」(以上、非過去断定形の末尾がル以外の動詞)、「取レレル・見レレル・来レレル」(末尾がルの動詞)のような形である。この変化は、能力可能/状況可能といった可能の意味に関わりなく起こっている。また、否定形の方が変化が早い。さらに若年層では、「～レレル/レレン」を非過去断定形の末尾がル以外の動詞に適用した三重可能形式も現れつつある。つまり、当該方言では下図のようにサイクリックな変化が起きているのである(①は多段型非r語幹、②は多段型r語幹、③は一段型を表す)。

	①	②	③
可能動詞	書ケル	取 <u>レ</u> ル	見 <u>レ</u> ル
二重可能	書ケ <u>レ</u> ル	→取 <u>レ</u> レレル	→見 <u>レ</u> レレル
三重可能	書ケ <u>レ</u> レレル	→取 <u>レ</u> レレル	→見 <u>レ</u> レレル

- ・コドモニ トレレルカヨー。(子供に取ることができるものか。)(方言)
- ・モー タベレレンローカネー。(もう食べられないでしょうか。)(方言)
- ・ソレガ セレレンニカーラン。(それができならしい。)(方言)

〈尊敬形〉

尊敬形は、受身形と同様に多段型および「する」の基幹ア段形に「レル」、一段型基幹や「来る」のオ段形に「ラレル」を付加した形のほかに、多段型および「来る」「する」の基幹イ段形・一段型基幹に「ナサル」が付加した形が用いられる。「来る」「行く」には、補充形「オイデニナル」もある。

- ・マー ヌックリ イテ オイデノー(まあ、ゆっくり行っていらっしやいね。)(大方)

「(ラ)レル」が付く形は「カカレル」「ミラレル」「コラレル」「サレル」などである。

「ナサル」が付く形は、「カキナサル」「ミナサル」「キナサル」「シナサル」となる。「-ナサル」の「サ」がハ行音化して「-ナハル」となることがある。

- ・マー インナハッターラ ミンナニ ヨーニ ヌーテ ヤンナハイヨ(まあお帰りになりました

ら、みなさんよろしく言ってくださいよ。)
(大月)

〈継続形〉

活用表にあげた形のほかに、「カキヨル」が「カキヨウ」、「カイチョル」が「カイチョウ」となることもある。この「-ヨウ・-チョウ」は長音ではなく二重母音で発音される。

継続形のうち動作進行を表す形は多段型・「来る」「する」の基幹イ段形および一段型基幹に「ヨル(またはヨウ)」が付いた形、完了(結果継続)を表す形は多段型基幹音便形・一段型基幹・「来る」「する」の基幹イ段に「チョル(またはチョウ)」「ジョル(またはジョウ)」が付いた形をとる。ただし動詞によっては「チョル・ジョル」が付いた形で動作進行を表すこともある。また、過去形と同様、一段型動詞の「着る」だけは「キーチョル」のように基幹(語幹)が長音化することがある。

- ・どうもねや、うわばみに殺された二ひきのべんのだましいが鳥んなち鳴きよるがじゃつことじゃが。(どうもね、うわばみに殺された二匹のべん [=犬の名前] の魂が鳥になって鳴いているのだということだよ)(昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)
- ・そういたらのう、今までおばあさんが着いちよったぼろぼろの着物がの...(そうしたらね、今までおばあさんが着ていたぼろぼろの着物がね...)(昔話・高岡郡葉山村・「山んばのもち」)
- ・ふちのはたには、おおけなフジのつるがたれさがちよったが、お藤は、そのつるの根もとにこしをおろいて、ふちの中を見つめて、じいっと考えこんじよるようじゃった。(淵の端には大きな藤のつるが垂れ下がっていたが、お藤はそのつるの根元に腰を下ろして、淵の中を見つめてじいっと考え込んでいたようだった。)(昔話・幡多郡三原村・「藤がとどろ」)

〈希望形〉

希望形は、多段型・「来る」「する」の基幹イ段形、一段型基幹に「タイ」が付いた形をとる。「タイ」は形容詞型の活用をする。

- ・ワシモー イマスケンクエモ チョット ヨリタ

イワエ (私も今助の家へもちょっと寄りたいさ) (大方)

〈のだ形〉

「のだ」は、連体非過去形・連体過去形や、丁寧形を除く派生類に、準体助詞「ガ」と断定の「ジャ」を付加した形をとる。丁寧形を作る場合は、「カクガデス」「カカンガデス」のように、「ジャ」を「デス」に代える。

「ジャ」は、終助詞「ヨ・ゼ・ゾ・カ」に接続する場合には現れず、「カクガ {ヨ/ゼ/ゾ/カ}」のようになる。それ以外の環境では「ジャ」が現れる。

この点は、名詞述語の活用と共通する。

- ・「わりゃあ生きちよったがか。」(お前、生きていたのか。)(昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)
- ・「そうかえ、そりゃえらいことになったのう。して、どうして、手をくくられたがぞ。」(そうかい、それはえらいことになったねえ。しかし、どうして手をくくられたんだ。)(昔話・中村市有岡・「えんこ」)
- ・「わしゃあ、えんこにたのまれてきたがじゃ。」(私はえんこに頼まれて来たんだよ。)(昔話・中村市有岡・「えんこ」)
- ・ひやくしょうは、カエルが雨をふらしてくれたがじゃと思っただけん、(百姓は蛙が雨を降らせてくれたのだと思っただけで、)(昔話・幡多郡三原村・「藤がとどろ」)
- ・「お藤は、いったいどこへ行くがじゃろう。」(お藤はいったいどこへ行くのだらう。)(昔話・幡多郡三原村・「藤がとどろ」)

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

形容詞述語は中止形・否定形・なる形において、交替語幹、もしくは交替語幹の長音形が用いられる。交替語幹は、語幹末母音が a、e の場合に現れ、どちらも才段となる。語幹末母音が a、e 以外の場合は、語幹そのまま、あるいは語幹を長音化した形を用いる (以下の表参照)。

語幹末母音	交替後	例
a	o	アカイ アコ (一) ナル イタイ イト (一) ナル
i	i	オーキー オーキ (一) ナル ウレシー ウレシ (一) ナル
u	u	ワルイ ワル (一) ナル ヌクイ ヌク (一) ナル
e	o	エー ヨーナル
o	o	オモイ オモ (一) ナル セコイ セコ (一) ナル

ただし、語幹末母音が a の形容詞のうち、「コワイ (怖い)」「セマイ (狭い)」など語幹末が wa、ma のものは、「コワ (一) ナル」「セマ (一) ナル」のように語幹そのままで見られることがある。ただし、常に語幹そのままで見られるわけではなく、例えば中止形の場合は「コオーテ (怖くて)」が用いられるなど、活用形や語彙によって交替語幹の使用状況に偏りがある。

〈断定非過去形〉

断定非過去形には、共通語と同じ「アカイ」が用いられる。

- ・ケーサツラガー アブナイ アブナイ ユーテ
コーヤッテ カキワケテナー (警察などが「危ない、危ない」と言って、こうしてかき分けてねえ。)(大月)

〈断定過去形〉

断定過去形は、語幹に動詞的接辞の音便基幹の「カッ」が付き、さらに過去の接辞「タ」が付いた形を用いる。動詞の断定形と同様に、「タ」と終助詞が融合することがある。

- ・オトオンチャンガ アノ センシシタ トキノ
アノ アノ トキノ オドリラト ユーモナ ハ
メザマシカッターナー。(音おじさんが戦死したときの、あのときの踊りなどというものは、めざましかったねえ。)(大月)

〈推量形〉

形容詞の推量形には、「アカイロー」のように断定非過去形に「ロー」が続く形のほかに、「アカイジャロー/アカイヤロー」のように、断定非過去形に推量を表す「ジャロー/ヤロー」が付く形もある。「ジャロー」は主に老年層に用いられ、中年層以下は「ヤロー」を用いる傾向にある。古くは「アカカロー」

のような、動詞的接辞のオ段形が用いられたこともあったようだが、現在では老年層でもほとんど使用しない。

- ・ナンボカ サムイロー。(随分寒いことでしょう。)(方言)
- ・「お藤が、みなげでもするがじゃないろうか。」(お藤が身投げでもするのではないだろうか)(昔話・幡多郡三原村・「藤がとどろ」)
- ・「どうぞして、勝つてはないろうかねや。」(どうかして勝つ手はないだろうかね。)(昔話・幡多郡佐賀町・「えんこうずもう」)
- ・ケンド ソリヤー ヨメバッカリ エー モンヂャナイ カタヒラバッカリ エーモンジャンイケニ オマエモ ナカナカ ヨカロ。(だけど、それは嫁だけが良かったためじゃない。片方ばかりが良かったためじゃないから、あなたもなかなか(心掛けが)いいわけだろう。)(大方)

〈過去推量形〉

形容詞の過去推量形は、「アカカツロー」のように動詞的接辞の音便語幹に「ツロー」が付いた形のほかに、過去形に「ロー」を付けた「アカカッタロー」や、過去形に「ジャロー／ヤロー」を付けた「アカカッタジャロー／アカカッタヤロー」も併用される。若年層は「アカカツロー」の形をあまり用いず、「アカカッタヤロー」を使うことが多い。

- ・どうぞ、おとろしかつつろん。(どうだ、怖かっただろう。)(昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)
- ・タイガイ オジーサン オモカツロ。(たいそうおじいさん、重かったです。)(大月)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は断定非過去形と同形で、「アカイ」が用いられる。

- ・「とみねえ、こんまい家じゃもん、じきにすまあえ。」(昔話・中村市具同・「泰作さん」)
- ・ケンド ヤッパー ソーユー トキノ ホーガ サングジヒキ ヒテカラ オコメバッカシ タベルヨリ ワシャー オイシーヨーニ オモータガナー (けれど、やはりそういう時の方が、さんご樹採りをしてお米ばかり食べるより、私は美味しいように思ったがねえ。)(大月)

〈連体過去形〉

連体過去形は断定過去形と同形で、「アカカッタ」のように、語幹に動詞的接辞の音便基幹の「カツ」が付き、さらに過去の接辞「タ」が付いた形を用いる。

〈中止形〉

中止形は交替語幹、または交替語幹の長音形に「テ」を付けた形をとる。語幹末母音が a、e、o の場合はオ段、u の場合はウ段、i の場合はウ段拗音となる。

- ・手足がみょうに細なごうて、まるで、やせガエルを立てらいたみたいな、みょうなかつこうじゃと。(手足が妙に細長くて、まるで痩せガエルを立たせたみたいな妙な恰好だ。)(昔話・幡多郡佐賀町・「えんこうずもう」)
- ・えんこうの腹は、ふうーと、まんまるうふくれあがった。(えんこうの腹はふうーと真ん丸く膨れあがった。)(昔話・幡多郡佐賀町・「えんこうずもう」)
- ・おとろしゅうち、おとろしゅうちたまらんよんなつちねや。(怖ろしくて、怖ろしくてたまらなくなったんだ。)(昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)

〈仮定形〉

仮定形には、語幹に「ケリヤー」(「ケレバ」の音声的縮約形)が付く形と、語幹に「カッタラ」が付く形が用いられる。

〈否定形〉

否定形は、中止形と同様に、交替語幹または交替語幹の長音形に「ナイ」を付けた形をとる。語幹末母音が a、e、o の場合はオ段、u の場合はウ段、i の場合はウ段拗音となる。ただし、語幹末母音が a 音の形容詞のうち、「コワイ(怖い)」などは「コワ(一)ナイ」などの形をとる。また、共通語と同様に、「ナイ(無い)」は否定形を持たない。

- ・オコメバッカシワ ソガイ オイシー ナイ(お米ばかり(の)飯はそれほどうまではない。)(大月)
- ・ケンド シシサクニ デヨータ トキラニヤ ソガイ ウレシユワ ナカッタゼ(けれどしし作[=猪に作物を荒らされること]に出会ったときなどは、そんなに嬉しくはなかったよ。)(大月)

〈なる形〉

なる形は、中止形や否定形と同様に、「アコ（一ナル）」のように、交替語幹、またはその長音形が用いられる。語幹末母音が a、e、o の場合はオ段、u の場合はウ段、i の場合はウ段拗音となる。ただし、語幹末母音が a 音の形容詞のうち、「コワイ（怖い）」などは「コワ（一ナル）」などの形をとる。また、「ナイ（無い）」は「ノーナル」のほか、断定非過去形に「ナル」を付けた「ナイナル」も使う。

- ・けんど、どうしたもんか、こしにぶらさげたびくが、ちっとも重うならん。（だけど、どうしたもんか、腰にぶら下げたびくがちっとも重くならない。）（昔話・中村市有岡・「えんこ」）
- ・マー マダ ゲンキニ アッタニネー ヒョイト ノーナリマシテ エー（まあ、まだ元気でしたのにねえ、ひよいと亡くなりまして。ええ。）（大月）

副詞形は、「なる」形の「ナル」を除いた形、または「ニ」を付けた形を用いる。

- ・ホイタラ ハヨー モドンナハイヨ（それでは早く帰りなさいよ。）（大月）
- ・インダラ オバーサンニモ ヨーニ ユーテ ヤンナハイヨ。（帰ったらおばあさんにもよろしく言ってくださいよ。）（大月）

〈丁寧形〉

丁寧形は、「アカイデス」「アカカッタデス」のように断定形に「デス」を付けた形を用いる。

〈のだ形〉

のだ形は、「アカイガ（ジャ）」「アカカッタガ（ジャ）」のように、連体形に準体助詞「ガ」を接続した形を用いる。丁寧形は「アカイガデス」のように、「ガ」の後に「デス」を付加する。動詞の「のだ」形と同様に、終助詞「ヨ・ゼ・ゾ・カ」が続く場合は、「アカイガ {ヨ/ゼ/ゾ}」（赤いんだよ）、「アカイガカ」（赤いのか）のように「ジャ」を介さない形を用いる。それ以外の環境では「ジャ」を介して後の形式に接続する。

- ・ワシャー チョビット ホシーガヂャガー（私はほんの少し欲しいんだけど。）（大方）

【形容名詞述語・名詞述語】

形容名詞述語の活用には、「シズカ（ジャ）」「シズ

カジヤナイ」のように、名詞述語の活用「学生（ジャ）」「学生ジャナイ」に対応する活用型（ジャ系活用型）と、「シズカナカッタ」「シズカナロー」のように、形容詞の活用「アカカッタ」「アカイロー」に対応する活用型（ナ系活用型）の2パターンがある。名詞型の活用は「シズカ」が名詞述語の名詞部分に相当し、形容詞型の活用は「シズカナ」の部分形容詞の語幹、または断定非過去形（「アカ」または「アカイ」）に相当する。形容詞型（ナ系活用型）をとりうる活用形はかなり多く、中止形・否定形・丁寧形を除く全ての活用形で可能である。一方で、共通語のように名詞型（ジャ系活用型）の活用形も備えており、連体非過去形・「なる」形・「のだ」形以外の全ての活用形で可能である。

〈断定非過去形〉

形容名詞述語では、「シズカナ」と「シズカ（ジャ/ヤ）」の2パターンがある。名詞述語では、名詞に「ジャ」または「ヤ」を付加した形が用いられる。

- ・オジーサンガナーシ モー ナンジャ ヨイヨ トロラワ ラクナ ユーテナー（おじいさんがねえ、「もう、なんだよ、たいそうとよ [= 人名] などは楽だ。」と言ってね）（大月）
- ・マー ゲンキナ コタ ゲンキナガ オマエ ドコ イッチョッタゾ（まあ、元気なことは元気だけれど、あなたどこへ行っていたのですか。）（大方）

動詞や形容詞の「のだ」形における「ジャ」の現れ方とも関連するが、「シズカ（ジャ）」のパターンの場合、形容名詞述語や名詞述語の断定非過去形における「ジャ」は、次のような分布をなす。

- …終助詞「ヨ・ゼ・ゾ・カ」が後続する場合
ジャ …終助詞「ネー・ナー」などが後続する場合、〈伝聞・引用〉を表す「ト」が付く場合、接続助詞が後続する場合

言い切りの（形容名詞・名詞で文を終止する）場合は、「ジャ」が現れることが多いが、現れないこともある。

- ・コノハナワ ショーキレイナ。（この花はほんとに綺麗だ。）（方言）
- ・ホントヤネー。（ほんとだねえ。）（方言）
- ・ショー マッコトゼヨ。（ほんとなんですよ。）（方言）

- ・大出合つところはねや、山田で一ばん深い山でねや、昼でも暗いつほどおとろしいとこぞ。
(大出合というところはね、山田が一番深い山でね、昼でも暗いというほど怖いところだよ。)(昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)
- ・わたしは昼おまえに殺されたうわばみのによ
うぼうじゃが、 (私は昼お前に殺されたうわばみの女房だけど、)(昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)
- ・「ははあ……うん……うわさに聞いたえんこのしわざじゃなあ。」(ははあ、うん、噂に聞いたえんこの仕業だな。)(昔話・中村市有岡・「えんこ」)

〈断定過去形〉

形容名詞述語の断定過去形には2パターンあり、「シズカナ-カッタ」のような形容詞活用型と、「シズカ-ジャツタ」のような名詞活用型がある。名詞述語は、「学生-ジャツタ」の形しかない。なお、形容名詞述語・名詞述語ともに「シズカヤッタ」「学生ヤッタ」のように「-ヤッタ」を用いることもある。

- ・マッコト キレーチャッタゾネ。(ほんとに綺麗でしたよ。)(方言)

なお、動詞や形容詞の断定形と同様に、「タ」が後続する終助詞と融合して「ト」になることがある。

- ・ハツカニワ ハズンデナーシ イヨイヨ モー
アレジャットネ (20日にはとても盛んでねえ、あれでしたね。)(大月)

なお、談話資料には「シズカニアッタ」のような形で現れることもあるが、現在はほとんど聞かれない。

- ・ゲンキニ アツタカネ オジサンワ (元気でしたかね、おじいさんは。)(大月)

〈推量形〉

形容名詞述語の推量形には2パターンあり、「シズカナ-ロー」のような形容詞活用型と、「シズカ-ジャロー」のような名詞活用型がある。名詞述語は、「学生-ジャロー」という形のみである。なお、形容名詞述語・名詞述語ともに「シズカヤロー」「学生ヤロー」のように「-ヤロー」を用いることもある。

- ・なしじゃろ、じしんじゃろうか思うち戸をあけち見たらねや。(何だろう、地震だろうかと思って戸を開けて見たらね。)(昔話・宿毛

市山奈町・「白べん黒べん」)

- ・なんつこちゃろと思うち、気づかいよつたら、ひょっこり二ひきともハアハアいうちもんち来たつわ。(何ということだろうと思って、心配していたら、ひょっこり二匹ともハアハアいって戻って来たというわ。)(昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)

〈過去推量形〉

形容名詞述語の過去推量形は3パターンある。すなわち、(1)「シズカナ-カツツロー」のように、形容詞の過去推量形と同じ形になるもの、(2)「シズカ-ジャツツロー」のように、形容名詞に「-ジャツツロー」を付加したもの、(3)「シズカ-ジャツタ-ロー」のように、過去形に推量を表す「ロー」を付加したものの、の3つである。(3)のタイプは、推量形式「ジャロー/ヤロー」を用いて、「シズカジャツタジャロー・シズカジャツタヤロー」となることもある。

名詞述語の過去推量形は、「学生-ジャツツロー」のように名詞に「-ジャツツロー」を付加するもの、「学生-ジャツタ-ロー」のように過去形に推量形式「ロー」を付加するものがある。推量形式「ロー」の代わりに「ジャロー/ヤロー」を用いて、「学生ジャツタジャロー・学生ジャツタヤロー」になることもある。

- ・ソレカラ ソノ トシジャツツロカー ソノ ア
クリトシジャツツロ トニカク ワシガ ジュー
ロクノトシニー (それから、その年だったろうか、その翌年だったろうか)、とにかく私が16の年に)(大月)

〈連体非過去形〉

形容名詞述語の連体非過去形は、共通語と同じ「シズカナ」が使われる。断定非過去形のように「シズカジャ」が用いられることはない。

- ・立ち上がち見たところが、ざまなうわばみじゃったと。(立ち上がって見たところ、大きなうわばみだったと。)(昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)
- ・ホント ゲンキナ ヒトヤツタニ ヨワツタナー
(ほんとに元気な人だったのに困りましたね。)(大月)

名詞述語の連体非過去形は、名詞と連体を表す助詞「ノ」の組み合わせで表す。この「ノ」は「ン」

になることもある。

- ・横瀬川いおろちん血んながれち、三日三晩まっかになつたつけんねや。(横瀬川におろちの値が流れて、三日三晩真っ赤になつたというからね。)(昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)

〈連体過去形〉

形容名詞・名詞述語ともに断定過去形と同形である。すなわち、形容名詞述語の断定過去形には2パターンあり、「シズカナ-カッタ」のような形容詞活用型と、「シズカ-ジャッ-タ」のような名詞活用型がある。名詞述語は、「学生-ジャッ-タ」の形しかない。なお、形容名詞述語・名詞述語ともに「シズカヤッタ」「学生ヤッタ」のように「-ヤッタ」を用いることがあるのも、断定過去形と共通している。

〈中止形〉

共通語と同じ「シズカデ」「学生デ」用いられる。

- ・アレカラー ホンデモ ヤッパ ゲンキデナー (あれからそれでもやっぱり元気でねえ。)(大月)
- ・アノ ジューヨッカニー アノー シンモジャノ オドリデ ジューロクニチガ ソノー センシシヤノ オドリデナーシ (あの14日に新亡者の踊りで、16日が戦死者の踊りでねえ。)(大月)

〈仮定形〉

共通語と同じナラ(バ)形「シズカナラ(バ)」「学生ナラ(バ)」、タラ形「シズカジャッタラ」「学生ジャッタラ」のほかに、形容名詞述語では、形容詞活用型の活用形が加わる。すなわち、「ケレ-バ」に由来する「ケリヤー」を後続させた「シズカナケリヤー」と、形容詞の音便語幹「カッ」に「タラ」を付けた「シズカナカッタラ」の2つである。

また、中止形に取り立て助詞「ワ」が付いた「シズカデワ」「学生デワ」、またはその融合形「シズカジャ(一)」「学生ジャ(一)」も用いられる。

- ・マー イマノ トコロジャノー (まあ今のところでは、)(大方)

〈否定形〉

形容名詞述語では「シズカジャナイ」「シズカデナイ」が、名詞述語では「学生ジャナイ」「学生デナイ」が用いられる。「シズカジャナイ」「学生ジャナイ」

の「ジャ」は中止形の「デ」と取り立て助詞「ワ」が融合したものであるが、「-デナイ」と「-ジャナイ」はほぼ同じ意味である。なお、「シズカヤナイ」「学生ヤナイ」のように「-ヤナイ」を使うこともある。

- ・ソナニ キレイヤナイ ジャイカ。(そんなに綺麗でないではないか。)(方言)
- ・ソナモナー エヂャーナイ。(そんなものは絵じゃない。)(方言)
- ・ケンド ソリヤー ヨメバツカリ エー モンヂャナイ カタヒラバツカリ エー モンヂャナイ ケニ オマエモ ナカナカ ヨカロー (だけど、それは嫁だけが良かったためじゃない。片方ばかりが良かったためじゃないから、あなたもなかなか(心掛けが)いいわけだろう。)(大方)

〈なる形〉

共通語と同様、「シズカニナル」「学生ニナル」という形をとる。「ニ」は「ン」と発音されることがある。

- ・横瀬川いおろちん血んながれち、三日三晩まっかになつたつけんねや。(横瀬川におろちの値が流れて、三日三晩真っ赤になつたというからね。)(昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)
- ・せいから、べんらあ二ひきがワンワン、ワンワンつつかり、つつかり、おおごとな っちねや。(それから、べん [=犬の名前] 達二匹がワンワン、ワンワンつつかり、つつかり、大事になってね。)(昔話・宿毛市山奈町・「白べん黒べん」)

〈丁寧形〉

丁寧形は、形容名詞・名詞に「デス」を付加した形「シズカデス」「学生デス」を用いる。

- ・エ イマ キュージューエンデス (ええ、いま90円です。)(大月)

形容名詞述語で、古くは「シズカニゴザイマス」という形が使われていたこともあるが、今はほとんど聞かれない。

- ・ハー ゲンキニゴザイマス (はあ、元気でございます。)(大月)

〈のだ形〉

「のだ」形は、形容名詞・名詞に「ナガ」を付けた形「シズカナガ」「学生ナガ」を用いる。「のだ」

形自体は名詞述語相当の活用をとる。したがって断定非過去形において、終助詞「ヨ・ゼ・ゾ・カ」が続く場合は、「シズカナガ {ヨ/ゼ/ゾ} (静かなんだよ)」、「シズカナガカ (静かなのか)」のように「ジャ」を介さない形を用いる。それ以外の環境では、「シズカナガジャケンド (静かなんだけど)」のように「ジャ」を介して後の形式に接続する。

- ・ソシナガヂャナイ (そういうわけじゃない [直訳: そんなのじゃない]) (大方)

用例出典

- 大方:「高知県幡多郡大方町」日本放送協会編(1999)『CD-ROM版 全国方言資料』NHK出版
- 大月:「高知県幡多郡大月町竜ヶ迫」日本放送協会編(1999)『CD-ROM版 全国方言資料』NHK出版
- 方言:山崎良幸(1961)「三 方言の実態と共通語化の問題点 11 高知」『方言学講座第3巻 西部方言』東京堂
- 昔話:土佐教育研究会国語部編(2005)『読みがたり 高知のむかし話』日本標準

参考文献

- 江端義夫(1982)「愛媛県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学8 中国・四国地方の方言』国書刊行会
- 山崎良幸(1961)「方言の実態と共通語化の問題点 11 高知」『方言学講座第3巻 西部方言』東京堂
- 吉田則夫(1982)「高知県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学8 中国・四国地方の方言』国書刊行会

(松丸真大)